

matohu——歴史にひそむ新鮮な美さを求めて

「matohu」デザイナー 堀畑裕之

MATOHU, IN SEARCH OF NEW POTENTIAL BEAUTY BEHIND HISTORY

Hiroyuki HORIHATA, Designer, matohu

I had been studying philosophy in university, but inspired by the successful Japanese designers at “Japonism in Fashion” held by KCI, I changed my major to fashion and studied dressmaking at Bunka Fashion College in Tokyo. At that time I happened to wear kimono and realized that the physical feeling when I was wearing kimono was totally different from that of wearing Western clothes. I rediscovered the natural fact that we could create clothes according to the same principle as that of kimono.

In 2005 I and my partner, Makiko Sekiguchi, established the brand “matohu” in Tokyo. We presented our first collection theme for the next five years on our official website. Our theme was “the Beauty of Keicho (the period from 1596 to 1615).” We repeated trials and errors every season in reflecting historical themes in clothes. We tried not to superficially copy things, but to accept and understand the energy in articles, and to create something new from the inspiration we had obtained through such experiences. After five years of “the Beauty of Keicho,” we started a new series “Japanese Eye” last season (autumn/winter 2010). This title came from the later-life writings of Muneyoshi Yanagi, the advocator of the Mingei Movement. This time we will focus on the Japanese sense of beauty, and reflect the abstract concept in specific clothes.

Although we have chosen Japanese historical incidents as our collection themes, we don’t want to stick to the traditional methods. We rather wish to create something that moves people living today in the same way as we actually saw and felt, and to produce something that they will want to wear. Matohu aims to create clothes not merely for consuming but for giving joyful feelings to wearers. We want to make clothes that are loved and worn for years. For that purpose, we are trying to develop the concept of the new from a broader perspective.

明治初期、政府の招きで来日した多数のお雇い外国人の中に、ドイツ人医師のエルヴィン・フォン・ベルツ [1849-1913] がいました。彼は日記にこんなことを書いています。日本人に、日本の歴史について質問すると、「われわれには歴史はありません」という答え

が返ってきて驚いた。「われわれの歴史は今からやっと始まるのです」と、教養のある人のほうがみんな過去を否定したがった、とその時の印象を残しています。

話は変わって最近の話ですが、東京の若手のデザイナーが欧米のテレビにインタビューされて答えているところをたまたまテレビで見ました。彼は、「日本にファッションの歴史はありません」と言っていました。

一瞬、唖然としました。彼は多分、西洋のファッションという文脈で言ったのかもしれませんが、以前読んだベルツの文章と重なって聞こえたのです。日本では友禅の絵柄を集めた雛形本が17世紀中頃から出回ります。ヨーロッパでファッション・プレートが流通するよりも百年ぐらい前のことです。「流行」という意味でいえば、日本に「ファッションがなかった」ということはないのです。

着物——新たな身体感覚

私は大学時代、イマヌエル・カントを中心にドイツ観念論を専攻し、大学院にも進みました。しかし、非常に限られた専門家としか共有できない問題を掘り下げていくことに疑問を感じ、多くの人とコミュニケーションを取れる開かれた世界で仕事をしたいと思うようになったのです。

その頃、偶然KCIの「モードのジャポニスム」展(1994年)で三宅一生や山本耀司、川久保玲といった日本のデザイナーたちの活動の素晴らしさに触れ、人生をファッションの世界にかけてみようと思ったのです。

東京の文化服装学院に入り直し、服飾の勉強を一から始めました。最初のクラスで一番意気投合したのが、今のパートナーの関口真希子です。最初は二人ともデザイナーになるつもりはなく、卒業後はお互いパタンナーとして働いていました。

そんなある日、関口がアンティークの着物を買ってきて、私にも着るように勧めてきました。いざ袖を通して何気なく東京の街を歩くと、さまざまなことに気付かされました。ひとつには、ここは日本で、日本の民族衣装の着物を着ているはずが、人々が皆、洋服を着ている現代の中では自分が何か外国人になったような気持ちになったことです。観念的なことですが、今という時間や自分の置かれている位置について、歴史を軸に鳥の目線で見える感覚を持つようになりました。着物が本来持っていた美意識や着こなしの美学、所作などから建築や都市の在り方まで、それらがいつからどのように変化し、今に到るのかを考えるようになりました。

もうひとつは、着物を着た時の身体感覚が洋服とは全然違ったことです。纏うとゆったりとした空間ができ、そこに帯をグッと腰で締めて歩く。体の中に風が抜けていく感じが

ありました。長らく西洋的な服作りの原則に慣れ親しんだ者として、こういう違う原理で服を作ってもいいのだ、という当然の事実を、この時再認識したのです。

これはこれから進むべき道の大きなヒントになると思いました。それで関口と共にそれぞれの会社を辞め、語学研修も兼ねて渡英しました。デザイナーのアトリエで働きながら1年間ロンドンで過ごし、ヨーロッパをバックパッカーとして2ヶ月程巡ってのち、2005年、東京でブランド「matohu（「まとう」と読む）」を立ち上げます。

このブランド名は日本語の「纏う」から来ています。「着る」と同義ですが、多様なニュアンスがある翻訳不可能な言葉の一つではないかと思います。服だけでなく、人格や雰囲気も〈纏う〉ことができます。もうひとつ、「待とう」という言葉も掛けています。ファスト・ファッション隆盛の昨今、服が速い流れでどんどん着ては捨て去られますが、それに対して「待とう」という意味と、私たち自身、これから成熟していくのを「待とう」という願いも込めています。

長着一変わらないという新しさ

ロンドン滞在時にブランド名だけでなく今後のコンセプトも二人で話し合いました。そして、最初に5年間のコレクションのテーマをホームページ上で発表するという「掟破り」をします。半年サイクルでコレクションのテーマを発表するファッション界では異例です。テーマは「慶長の美」。日本の歴史の中で自分たちが一番好きな時代、貿易による南蛮や明の文化の流入や、派手で豪壮な桃山文化、千利休による侘び寂びの美意識を深化させた古田織部らの茶の文化など、さまざまな面白い文化が同時に花開いた時代です。歴史をテーマにしながら、それをどうやって服に落とし込むか、毎シーズン試行錯誤を繰り返していました。

コレクションをスタートする時、最初に、テーマに関する資料や文献を集めて読み込みます。実物に触れ、可能であれば実際に手に取って鑑賞します。例えば、「織部」をテーマにした時（2005年秋冬、2010年春夏）は、桃山時代に織部が焼かれていた岐阜の土岐・多治見に行き、元屋敷窯跡を訪ね、作陶もしました。表面的に何かをそのまま写すのではなく、物が持つエネルギーを自分たちなりに受け止め、理解し、そこから得られるインスピレーションによって新しいものを作り出すためのプロセスです。

matohuでは着物地や和柄は使いません。伝統工芸の職人さんと仕事をする時もあります。彼らには、日頃深くかかわっている着物の枠組みや考え方から離れたところでその技能を発揮してもらうために時間をかけて意思の疎通を図っています。

生地は機屋さんに直接掛け合って作ってもらいます。日本には素晴らしい服地の産地が

各地にあります、今、安価な海外製の生地を押されて試みです。非常に危機的な状況です。ウールからタオル地や化繊まで、他に類を見ないほど国内で多種多様な生地が生産されているし、クリエイティブで、自らの工夫でこれまでにないようなものを作る生地屋さんが今でも数多くあります。日本でものを作っている限り、こういう人たちを大事にしながらやっていきたい。

それから、毎シーズン、「長着（ながぎ）」という新しいカテゴリーの服を発表しています。コートでもなくワンピースでもなく、もちろん着物でもなく、どのように着てもいいものです。

長着は、形を変えないことがコンセプトです。定番品ではなく、変えないことがデザインだと考えています。これは着物のエッセンスにも通じるでしょう。サイズの大小はあれ、着物は形が変わらないし、性差による違いも基本的にはあまりない。時代を超えて着られる利点がありながら、織り柄や着る人の雰囲気、帯や半襟の合わせ方や着こなしで、全く違うものに見えてしまう。matohuの長着は外と内の2枚ワンセットになっており、別々に着たり、別シーズンの長着と組み合わせたり、着る人の感覚によっていくつものスタイルが生まれます。今のファッションのように、以前に買ったものがストックになってしまうのではなく、常にチョイスになる、というコンセプトで作っています。

日本の眼——〈伝燈〉のエッセンスとクリエーション

「慶長の美」の5年が終わり、先シーズン（2010年秋冬）から新しいシリーズに入りました。テーマは「日本の眼」です。民藝運動の提唱者、柳宗悦〔1889-1961〕が晩年に書いた文章のタイトルから引いてきたものです。一定の時代の具体的な事物から出発した「慶長の美」シリーズと異なり、今回は、日本の美意識そのものに目を向け、抽象的なコンセプトから具体的な服に落とし込もうと思っています。

最初のシーズンのテーマは「かさね一秋冬」として、平安時代に生まれた「かさね色目」を取り上げました。色を重ね合わせてできた色目に名前を付けて楽しむだけでなく、そこに自然や季節を感じて、ふさわしい時期にその色を纏う。かさね色目は、今は定式化されて伝わっていますが、本来は平安貴族の感性から生まれた自由な表現だったそうです。それを現代の東京の街などで感じられる色の重なりに置き換えて自分たちなりに表現したのがこのコレクションです。今回はすべてのルックに名前がついています。例えば「イルミネーション」という言葉を目にした時、服だけでなくそこにある色を通して街の風景を向こう側に見ることができれば、と思っています。

日本の歴史的な事物をコレクションのテーマにしていますが、伝統的なやり方をなぞる

のではなく、今生きている人たちに、自分たちが実際に見て感じたのと同じ感動を与えるもの、着たいと思わせるものを作りたいのです。実は、「伝統」は「伝燈」とも書いていたそうです。比叡山延暦寺の不滅の法灯のように、燃えている火が後代まで伝わっていくイメージがあって私は好きです。その火は昔からありますが、燃えているのは〈今〉です。新しい油を吸い上げて、火はいつも今燃えているのです。

日本とは何か？ 日本人はこのことを常に問い続けています。恐らく、島国だからこそ諸外国の影響を受けやすく、自己を相対化する鏡を必要としたからでしょう。日本のアイデンティティーを探しても答えは出ないかもしれませんが、それを繰り返すことで思考は洗練されていきます。唐物（＝真）に対して和物の歪んだ茶碗や籠の花入（＝草）が生み出されたのも日本人の自己反省の能力によるものでしょう。そうして培われた日本の美意識、またそれを反映した建築、絵画、工芸が、歴史を貫いて確かに存在しています。

デザインの視点で考えてみても、自分が地に足の着いていないもの、リアリティーのないものを想像で作ると危うく弱い作品になりがちです。本当によいものを作っている人は自分のオリジンを自覚している人だろうと思います。自分は偶然日本に生まれ、日本人としてさまざまな文化を吸収しているのだから、そこに根付いたものを作りたい。

matohu の目指す服は、消費するためだけの服でなく、着てくださる方の心に喜びが生まれる服です。愛着を持って何年も着てもらえる服にしたい。そのためにも新しさの概念をもっと幅広く持ちたいと思っています。半年後に古くなるトレンドの新しさでもなく、新奇を求めるアヴァンギャルドの新しさでもないもの。例えば、ふと夜空を見上げた時に輝いている月や、車窓から眺める夏の田園風景など、変わらないものに含まれた美しさや新鮮さを服で表現したい。そういう志で毎シーズン、コレクションをしています。ファッションの中で誰もやっていないことをやろうと思ってやり始めたのですが、共感してくださる方々がだんだん増えてきて、自分たちとしてはとてもやりがいを感じています。

（本稿は、2010 年 8 月 6 日に KCI の博物館実習カリキュラムの一環として実習生向けに開催したレクチャーを基に、実習生との質疑応答やその後の聞き取りを含め再構成したものです。）

〈図版〉

Fig.1 matohu の長着（2009 年秋冬コレクション「かぶき者」より）

Nagagi matohu's signature kimono-inspired item. (Autumn/Winter 2009. Collection "Kabukimono" from the series "Keicho no Bi" [Beauty in the Keicho period].)

Fig.2 織部筒茶碗 銘 冬枯 桃山時代（17 世紀） 岡谷家寄贈 名古屋 徳川美術館 重要文化財

Tea Bowl, named *Fuyugare*. Momoyama period (17th century). Mino Ware, Oribe style; ceramic. Donated by the Okaya Family. The Tokugawa Art Museum, Nagoya.

Fig.3 matohu／堀畑裕之、関口真希子 2010 年春夏コレクション「織部」

matohu/ Hiroyuki Horihata, Makiko Sekiguchi, Spring/Summer 2010. Collection “Oribe” from the series “Keicho no Bi” [Beauty in the Keicho period].”

Fig.4 matohu/堀畑裕之、関口真希子 ドレス《イルミネーション》 2010年秋冬コレクション「かさね—秋冬」
matohu/ Hiroyuki Horihata, Makiko Sekiguchi, Dress Illumination, Spring/Summer 2010. Collection “Kasane (Layers): Autumn/Winter” from the series “Nihon no Me” [The Japanese Eyes].”

堀畑裕之（ほりはたひろゆき）

大阪府堺市出身。「matohu」デザイナー（関口真希子と共にデザイン）。同志社大学大学院でドイツ哲学を専攻。哲学修士。卒業後、東京の文化服装学院アパレルデザイン科にすすみ、関口と出会う。1998年からコム・デ・ギャルソンのレディースのパリコレクションチームでパタンナーとして勤務（2003年まで）。2003年、渡英。ロンドンでBora Aksuのアトリエで働く（2004年まで）。2005年、「matohu」を立ち上げる。2006年よりJFW東京コレクションに参加。2009年、毎日ファッション大賞新人賞および資生堂奨励賞を受賞。（※肩書は掲載時のものです）